月刊

こころのとも

第十一巻
四月号

ひたすら瞑想する

他のことを
やりたい気持ちも
何も
やりたくない気持ちも
ともに抑えて
ただひたすら
瞑想する

それによってはじめて
自らを制して
他をたてることが
できるようになれる

凡聖を分けるもの

凡人と聖人を分ける
決定的相違点は
極めて簡単
それは
欲望に執着するか
しないか

人生を考え直して みたい人は（七五）

―『正法眼蔵』解説（一九）―

有時（うじ）の巻を続けます。

> 恁麼（いんも）の道理なるゆゑに、尽地に万象百草（ばんぞうひゃくそう）あり、一草一象おのおの尽地にあることを参学すべし。かくのごとくの往来は、修行の発足なり。到恁麼（とういんも）の田地のとき、すなわち一草一象なり、会象不会象（えぞうふえぞう）なり、会草不会草なり。正当恁麼時のみなるがゆゑに、有時みな尽時なり、有草有象ともに時なり。時時の時に尽有尽界あるなり。しばらく、いまの時にもれたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし。

例によって、参考までに現代語訳として、玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵1』（大蔵出版刊）のものを引用させて頂きます。

このような道理であるから、大地には、さまざまな事象・事物が存在しており、その一つ一つの事象、一つ一つの事物が、それぞれに大地全体にあることを参学すべきである。このような事情を心得ることが、仏道修行のてはじめである。そして、このような境地に到るとき、そこに一つ一つの事象、一つ一つの事物がある。その事象を理解している場合もあり、理解していない場合もある。また、その事物を理解している場合もあり、理解していない場合もある。

しかしいずれにしても、まさしくそのような時ばかりであるから、存在即時間（すなわち絶対生命）は、すべての時に行きわたっている。事物や事象があるということが、すでに時である。その時その時の時に、存在すべてを尽くし、世界の全体を尽くしている。いったい、いまの時に漏れている存在全体・世界全体というものが、あるのか、ないのか、と思いはかるべきである。

今回の部分は、特に難解です。おそらく、皆さんも、現代語訳を読まれても、ちんぷんかんぷんではないかと思います。これまでなされた現代語訳や解説を読んでみても、まちまちで、満足できるものは皆無です。私の体験や理論に基づいて解説してみたいと思います。

まず出だしの「恁麼の道理なるゆえに」ですが、これは、現代語訳にある通り「このような道理であるから」ということです。このような道理とは、先月号にありました、「自己の時なる道理」ということです。それは、時とは自分が体験してきた精神世界の全体だ、ということでした。それが、先月号にあった原文の「われを配列して、われこれをみるなり」ということです。面倒でしょうが、もう一度、先月号をご覧頂ければと思います。

次の「尽地に万象百草あり、一草一象おのおの尽地にあることを参学すべし」ですが、これが、なかなか難解です。失礼ですが、現代語訳ではまったく分かりません。

例えば、この「尽地」ですが、現代語訳にありますように、大地は不適当です。尽地は、大地ではありません。それは、先月号で出てきました、「尽界」と同義のことばです。内的な精神世界の全体です。物理的に外界に存在する大地ではないのです。ですから、「万象百草」は私たちの精神の中に存在しているのです。先月号の言葉で言いますと、それは「頭頭物物（ずずもつもつ）」で、事と物ということです。つまり、出来事と物が精神の中に存在しているのです。

もちろん、具体的には事や物は外界にあるわけですが、私たちが生きていく上で、それらが意味をもつのは、私たちの精神にどういう位置を占めているかに関わっているのです。いくら外界に存在しても、生きていく上で、精神に対して意味を持ち得ないならば、それは、物でも事でもあり得ないのです。つまり、時ではないということなのです。

次の、「一草一象おのおの尽地にあることを参学すべし」ですが、これまでの説明でお分かりだと思います。それは、あらゆる個々の物・事が、全体の精神世界の中に位置を占めているのだ、ということを参学すべし、ということなのです。参学とは、参禅学道の略ですので、坐禅に参加して、道を学ぶべきだということです。

こうしたことは、実は、無意識の世界で起こることですので、ことばで理解することはなかなか難しいことなのです。ということは、体験するときだけ、理解できることだということです。参禅学道すべしとは、そういうことなのです。

そうした境地に達しますと、老子が言いますように、「無為而無不為」（為すこと無くして、為さざること無し）という境地に到るということなのです。ソクラテスでいいますと「無知の知」です。老子にひきうつして言いますと「無知而無不知」ということです。外界の全てが、自分の精神世界の中に存在するのです。

この境地が、実は次に出ています「到恁麼の田地のとき、すなはち一草一象なり、会象不会象なり、会草不会草なり」ということなのです。「到恁麼の田地」とは、解脱の境地のことで、私のことばでいいますと、自己・他己の精神全ての統合です。次の「一草一象」は解説済みですので、次の「会象不会象なり、会草不会草なり」に進みます。どの解説書もこれが全く理解できていません。この「会象（而）不会象」と前出の「無為（而）無不為」とを比べてみて頂きたいと思います。よく似ていると思われませんか。一方は肯定で書かれ、他方は、否定で書かれていることに気づかれると思います。

実は、無意識の世界では、肯定も否定も同等なのです。正しく言いますと、そこは、肯定も否定も、共に否定された絶対否定の世界なのです。そして、そうした世界は、形式論理や弁証法では捉えられない世界で、そこでは絶対否定は絶対肯定でもあるのです。肯定も否定も超越していると言えます。ということは、否定でも肯定でもよいのです。有も無も統一されていて、ことばで言いますと、有でもあり、無でもある、あるいは、有でもない、無でもない、と言えるのです。ですから、事象に会うのに会わないということになるのです。存在物に出会うのに出会わないということになるのです。道元は老子を意識して、それを逆用したのかどうか分かりませんが、弟子たちは、大いにとまどっています。

順序が逆になりましたが、少し戻って「かくのごとくの往来は、修行の発足なり」に行きます。これは、前出の「尽地に万象百草あり」と「一草一象おのおの尽地にある」という二つの世界の「往来（＝ゆきき）」が、修行の出発点である、ということです。私たちの精神世界に、外界のあらゆる事物が映し出されるのだということは、常識（意識）の世界の話で、誰でも理解できるのですが、あらゆる個々の一草一象が、すべて自分の精神世界に位置付けられているということは、実は、「無見而無不見」という境地に到らなければできないことなのです。

ですから、修行の出発点では、坐禅によって自分の無意識に沈潜し、その境地に到ろうとしますが、すぐ意識の世界に戻ってしまう、つまり、二つの世界を往来している、ということを言っているのです。

次に進みます。「正当恁麼時のみなるがゆゑに、有時みな尽時なり、有草有象ともに時なり」ですが、ここまでくれば、理解はしやすいと思います。

解脱の境地では、このような理に合った正当な時のみですので、この生きている時が、全ての時を尽くしてい

る、といえるのです。言い換えますと、いま生きている現在が、過去も未来も全ての時間を尽くしているのです。それは、永遠の今を生きているとも言えるものです。境地でいいますと、もう何万年も生きてきているという気持ちです。そこでは、自分と一体と感じる全ての存在が時であると言えるのです。

最後の部分に進みます。「時時の時に尽有尽界あるなり。しばらく、いまの時にもれたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし」ですが、これまでの説明でお分かりでしょう。解脱の境地に達しますと、その時その時の時に、あらゆる存在を尽くし、あらゆる世界を尽くしている、ということなのです。

道元は、ここで解脱の境地が宇宙の根源（仏・如来）と一体になることだとは言っていませんが（だから分かりにくいのだとも言えますが）、無意識の世界でそうなりますと、意識の世界では、あらゆる存在が自分と一体であると感じることができますし、また、自分が永遠の時を生きているわけですから、あらゆる存在を尽くし、あらゆる世界を尽くしていると、言えるのです。

最後の部分は、解脱に到らないで修行の中途にある者は、今の時に漏れている事物があるのかどうか、想いを巡らしてみなければならない、と言っているのです。

「想いを巡らせ」と言われても具体的には、とても難しいことです。

私の体験で言いますと、何度も言っていますが、例えば、人間（「精神」）だけではなくて、「物質」も「生命」も、全てのものが、自分と一体であると感じることができるかどうか、あるいは、名利や生命、その他あらゆることへの執着が消えているかどうか、自分の年齢が仏さまと同じだと感じられるかどうか、お迎えが来たら、喜んで行けるかどうか、といったことがそれに当たるように思います。

でも、こんなことを毎日毎日、想っていては、困ります。大切なことは、ただ、ただ、ひたすら修行することなのです。修行によって、解脱するかどうかを問題にすべきではないのです。現在のカルト集団（自ら「宗教」と称する新興の団体のことを最近はこう呼ぶようです）では、こうすれば解脱する、といって宣伝して信者を集めるようですが、もってのほかです。私の知る限り、教祖すら解脱などしておりません。

そんなことを目指すのではなくて、為すべきことは、聖者の教えを信じ、それに則って生きていこうとすることなのです。そして、その教えに従って、ひたすら修行することなのです。

自作詩短歌等選

業績評価なき大学

会社では
退職金が
業績で
格差がつくと
言うけれど
大学教授
日本では
怠けてゴマする
人ほどが
多くの報酬
得る仕組み

大学改革
ここから始めよ

質素倹約取り戻そう

日本では
食べ物多く
捨てるのに
世界じゅうには
一億も
貧困な人
いるという
質素倹約
取り戻さねば

主体性のみの学校

主体性
ばかり教える
学校が
崩壊するのは
当たり前
客体性も
言わなけりゃ
社会崩壊
必然のこと

数と力が勝つ

正義は勝つ
という
でも
民主主義では
数と力が勝つ

言うは嘘ばかり

ありがとう
と言わない

ごめんなさい
と言わない

でも
うそは言う
四歳児

法灯明の否定

釈尊は
なくなる前に
人生は
自灯明
法灯明
とおっしゃった

でも
いまは
法灯明がなくなって
自灯明のみに
なっている

それは
民主主義が
法灯明を
否定しているから

また
仏教では
自利と利他の
統合を教えるが
いまは
自利のみで
利他がなくなっている
これも
民主主義の悪弊

自他のコントロール

現代人は
自分自身を
コントロールしないで
他者や物的環境ばかりを
コントロール
したがっている

矛盾する思想の混在

自由競争を
重視する思想と
一人ひとりを
尊重する思想は
相いれない

そのことに
早く気づこう

食生活の異常

子どもさえ
一方では
食べ過ぎて
肥満になり
成人病にかかる

他方では
太ることを嫌い
ダイエットし過ぎて
女の子が
無月経となる

自作随筆選

教育改革座長発言

総理大臣の私的諮問機関である「教育改革国民会議」の座長に、ノーベル物理学賞受賞者の江崎玲於奈氏が就任することになった、ということで、毎日新聞三月十一日付けの「ひと」欄には同氏へのインタビュー記事が載りました。

その見出しには「セカンドランナーよりトップランナーを育てたい」とありました。

また、記事の中には「日本の教育は、これまではトップランナーよりも、欧米に追いつけ追い越せとセカンドランナーを育ててきた。これからは手本を追う人間ではなく、トップランナーの養成が必要」とありました。

読んで、驚きというか、あきれたというか、「まあそんなもんだろうな」という思いが致しました。

日本は明治の鎖国開国以来、大東亜戦争敗戦をはさんで、欧米に「追いつき追い越せ」でやってきました。それは、「富国強兵・殖産興業」というスローガンとして国を支える重要な政策となって来たのです。

しかし、いま、まさにこの富国強兵・殖産興業という考え方そのものが問われているのだと思うのです。

いま、教育改革（教育基本法改正を含めて）だけではなく、憲法の改正や二十一世紀への変革などが取り沙汰されています。この背景には、日本の経済の衰退ないし停滞があることは明らかですが、その他にも日本社会で起こっている若者のこれまでにないような逸脱行為の日常化や、普通では考えられないような「異常な事件」の続発、あるいは、倫理を示すべき僧侶、教師（大学教員を含めて）、警察官、法曹関係者などをはじめとして、官吏、政治家、財界人など、全ての職業人の倫理の崩壊、などがあるように思えるのです。

富国強兵・殖産興業の叫びの甲斐があってか、日本は先進国の中では、経済大国といわれる国になりましたが、でも、私から見れば、その代償として、前述のように、国民の「こころの荒廃」とも呼べるような高い代価を支払わされているのです。

多くの人たちがこの「こころの空洞化」に気づき、この危機を乗り越えようとする機運が、さまざまな変革への取組みとなって現れているのだと思うのです。

さて、先程の江崎氏の「セカンドランナーよりもトップランナーを育てたい」という発言ですが、これは、明

治以来の「富国強兵・殖産興業」を一歩も出るものでないことは、誰の目にも明らかです。

セカンドランナーとかトップランナーとか言ってみても、大した違いはありません。それらは、どちらも競争に打ち勝つ事だけを目指したものだからです。言葉にとらわれて言えば、追いついて「追い越した」状態が、トップランナーなのです。難しく言えば、たとえトップランナーになっても、相対なものは必ず、また、セカンドランナーや、それ以下になってしまうので、どちらも同じ原理の中にあるのです。

いま、アメリカが、自由競争を謳歌し、世界中から富を奪取して、未曾有の経済発展をなし遂げています。しかし、相対なもののたとえとして適切だと思うのですが、やがて燃え尽きて消えていく花火に例をとれば、アメリカの繁栄は、線香花火の最後のあの「華やかさ」の中にあるように私には思えます。

もはや自由競争の時代は終わらさなければならないのです。世界中が仲良く生存していくためには、自由競争・グローバリゼーションでは、だめなのです。

それは、やがてダーウィンが説いた動物原理である、適者生存・サヴィイバル競争に陥ってしまうのです。

でも、江崎氏の発言は、この愚かなアメリカをお手本にしているのではないかと思えます。

いま、日本は世界に先駆けて国民の「こころ」がすさんでいます。貧しくなっています。

逆にいいますと、だからこそ、いま日本は世界にそこから回復する道を示しえるのです。それは、日本の教育を変えることでしか、達成することはできません。その方向を示さなければ、教育改革国民会議の意義はないのです。

それは、地球全体が一つの家族のように、お互いが手を取りあって助け合う社会です。私のことばで言えば、「人の心を感じるこころ」をもって、自らを制することです。そういう人を育てる教育をすることです。

それは、道元禅師も言われたように、「こころを磨いて仁に至る」道なのです。あるいは、聖徳太子で言えば「和を以て尊しとする」世界なのです。

相対なものは、正しいと思って間違いを犯します。現在、世界中が自由民主主義の中にあって、そうなっています。絶対な教えが廃れて、相対なものだけが、意味をもつ世界になっているのです。トマス・クーンの言うように、科学さえも政治的なものになってしまっています。

でも、日本人は、皆が仲良く暮らす原理を見つけてきました。いまや、それを取り戻す時が来ているのです。

子どもの言葉づかい

二月二十七日付けの読売新聞の広告として、ＮＥＣのファックスの宣伝が載りました。それは、子どもが家のファックスから、勤め先の父親のパソコンにＥメールするというものなのですが、その送った内容が、私にとっては、とても衝撃的でした。その内容とは次の通りです。

「ケーキたべちゃうぞ」「ぱぱはやくかえってこい」

というものです。

かつて、私も、知り合いの小学校一年生が電話で母親と話しをするのを聞いていて、とても考えられないような、ぞんざいな言葉づかいだったので驚いたことがありました。でも、それは、その家のしつけのせいだと思っていました。

ところが、この広告を見て、それが、そうではなく、全般的、一般的に子どもの言葉づかいが、ぞんざいになっていることを知りました。なにせ、こんな言葉づかいの広告をしても、ＮＥＣは、このファックスがよく売れると考えているわけですから。

日本では、まったく親の権威がなくなり、子どものこころが荒れています。この広告もそれを助長しています。

児童虐待とは

与党３党が、急増する児童虐待への対応策として、児童福祉法の改正を目指すといいます。その改正案の中で、児童虐待が定義されていて、次の四つの行為があるときとされているようです。①身体に外傷が生じたり、生じる恐れのある暴行、②わいせつ行為をしたり、わいせつ行為をさせる、③食事を与えなかったり、長期間放置する保護の怠慢、④心理的外傷を与える言動。

なるほど、こうした行為が親や養育者によって為されてはならないことは、当然のように思えます。

でも、私の体験で言いますと、親に叩かれ、しょっちゅう「頭にたんこぶを作っていました」し、時には、言うことを聞かないといって「食事を与えられなかった」り、また、日常茶飯事に「心理的外傷を与える言動」がありました。でも、それは、どこの家でも大同小異で、子は親に叱られるものだと思って育ちました。また、祖父母が、常に慰め役をかってくれていました。

でも今は、核家族化して慰め役はなくなり、親も愛情を薄くして、夫婦で子どもを虐待するようで、こうした児童福祉法の改正がいるようになったのだと思います。

今後の家族のあり方

三月二十八日付けの毎日新聞に、文化人類学者で、政策研究大学院大学教授・青木保氏が、シリーズの「家族の変容」欄に、「崩壊した近代のモデル論」と題して記事を書いていました。

そこには、従来の家族のあり方とその崩壊を論じた後、最後に次のような結論的な文章がありました。

「家族が多様であり得ることを認めることを前提とした新しい家族観がいま必要とされている。それはわが子であっても生まれたときから『他者』としてみて、その上で親として愛を注ぐ、育てる義務ははたすが、すみやかに独立させる。それが子のつとめともなるとの社会的常識を必要とする。願わくばその上で家族は大いに栄えて欲しい。」

私は、文化人類学者の新しい家族論を読むのは初めてなのですが、この結論を読んで、これでは、現在の延長であって、ますます家族は崩壊して行く、と思えてきました。例えば、この文章に出てくる言葉で気になるものが、幾つかあります。それらは、「わが子を他者として見る」とか、「育てる義務」とか、「すみやかに独立させる」とか、といった言葉です。

わが子を他者と見る、ということですが、これは、欧米の個人主義（自由主義・民主主義）に毒された考え方だと思います。つまり、この人は個人主義を肯定・是認していることを示しています。そのことは、後に出ています、わが子をすみやかに独立させる、という記述と一貫しているのです。

これでは、ますます子どもと親とはよそよそしくなり、コミュニケーションができなくなってくると思います。

この人がいうように「家族が大いに栄え」るためには家族構成員（祖父母、親、兄弟、叔父叔母など）の心理的絆が強固でなければなりません。つまり、コミュニケーションが常に為されていなければならないのです。

人は誰かと心を通わせているときだけ、生きている幸せを感じることができるのです（その誰かが、絶対な他者（神や仏）の場合が最高ですが）。

わが子を他者として見る、ということは、既にコミュニケーションの本質が失われています。コミュニケーションの本質は自他の一体感にあるからです。

現在、既に、家族間のコミュニケーションが希薄になり、家庭は崩壊していっています。それは、五歳の子どもを見ていても分かることです。

後記

一、桜が満開です。四月八日は釈尊の誕生日で、花祭りでした。

二、このところ、毎日、畑を見に行っています。二月の終わりごろ植えたジャガイモが半分ほど芽を出しています。十二月初めに定植したキャベツが、今になってどんどんと大きくなっています。その他、ニラ、エンドウ、タマネギ、なども、すくすくと育っています。収穫が楽しみです。

三、畑の近くや近所の土手に、つくしがたくさん生えていますので、何度も採ってきて、玉子とじにして食べました。昨年も書きましたように、はかまをじくと共にハサミで切って取りますと、細切れにはなりますが、とても楽に取れます。

四、二月号で紹介しました現職教員のゼミ生・小川敦君が、無事、大学院を修了し、神奈川県の小学校に帰っていきました。信仰もあつく能筆な人で、本にするための原稿を三冊書いてくれました。出版依頼を別々に三社にしています。まだ、返事は来ていませんが、どこかで出せるのではないかと思っています。一冊は、専門の学習障害に関するものです。他は、仮に題を付けているのですが、『情育のすすめ―こころを育てる―』と『心を磨け―心理学で語る「四聖」の教え―』です。私が監修者で著者が小川君になっています。また、昨年五月号で紹介しました『大乗起信論解説』の後半が、完成しました。私は、読みやすいと思うのですが、難しいという感想も聞かれました前回の分と合冊にしています。これも、どこかで出版できればと思っています。

五、もし、どれでも結構ですが、ご希望がありましたら、無料でコピーをお送りいたします。お申しつけ下さい。

六、ご縁を頂き、人権と宗教について、三月十日に穴吹町で講演をさせて頂きました。五十人ほどでしたか、熱心に聞いて下さいました。ありがとうございました。

月刊　こころのとも　第十一巻　四月号　（通巻一二四号）

平成十二年四月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号01610―8―38660